

広島県感染症発生動向月報

[広島県感染症予防研究調査会]
(平成20年10月解析分)

1 疾患別定点情報

(1) 定点把握(週報)五類感染症

平成20年9月分(平成20年9月1日～9月28日:4週間分)

No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号	No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号
1	インフルエンザ	0	0.00	0.00		10	百日咳	23	0.08	0.03	↗
2	RSウイルス感染症	69	0.24	-	↗	11	ヘルパンギーナ	97	0.34	0.52	↓
3	咽頭結膜熱	73	0.26	0.61	↓	12	流行性耳下腺炎	46	0.16	0.72	↗
4	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	175	0.62	0.48	↗	13	急性出血性結膜炎	1	0.01	0.02	
5	感染性胃腸炎	869	3.06	3.41	→	14	流行性角結膜炎	73	0.96	1.49	↘
6	水痘	205	0.72	0.48	↗	15	細菌性髄膜炎	0	0.00	0.01	
7	手足口病	291	1.02	0.38	↘	16	無菌性髄膜炎	3	0.04	0.11	
8	伝染性紅斑	37	0.13	0.13	→	17	マイコプラズマ肺炎	17	0.20	0.22	↗
9	突発性発しん	229	0.81	0.74	→	18	クラミジア肺炎	0	0.00	0.00	

(2) 定点把握(月報)五類感染症

平成20年9月分(9月1日～9月30日)

No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号	No	疾患名	月間発生数	定点当り	過去5年平均	発生記号
19	性器クラミジア感染症	60	2.61	2.33	↗	23	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	100	4.76	5.09	→
20	性器ヘルペスウイルス感染症	15	0.65	0.55	→	24	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	19	0.90	1.16	→
21	尖圭コンジローマ	12	0.52	0.45	→	25	薬剤耐性緑膿菌感染症	4	0.19	0.45	
22	淋菌感染症	29	1.26	0.89	↘						

「過去5年平均」:過去5年間の同時期平均(定点当り)
報告数が少数(10件程度)の場合は発生記号は記載していません。

急増減疾患!!(前月比2倍以上増減)

急減疾患 咽頭結膜熱(214件 73件)
急減疾患 ヘルパンギーナ(216件 97件)

発生記号(前月と比較)

急増減	↑	↓	1:2以上の増減
増減	↗	↘	1:1.5～2の増減
微増減	↗	↘	1:1.1～1.5の増減
横ばい	→		ほとんど増減なし

定点把握対象の五類感染症(週報対象21疾患,月報対象7疾患)について,県内178の定点医療機関からの報告を集計し,作成しています。

	内科定点	小児科定点	眼科定点	STD定点	基幹定点	合計
対象疾病No.	1	1～12	13, 14	19～22	15～18, 23～25	
定点数	43	72	19	23	21	178

2 一類・二類・三類・四類感染症及び全数把握五類感染症発生状況

類別	報告数	疾患名（管轄保健所）
一類	0	発生なし
二類	48	結核（広島市保健所（15）、福山市保健所（14）、呉市保健所（4）、広島地域保健所（2）、呉地域保健所（1）、東広島地域保健所（4）、尾三地域保健所（4）、福山地域保健所（1）、備北地域保健所（3））
三類	17	腸管出血性大腸菌感染症（O157）（8）．〔広島市保健所（2）、福山市保健所（5）、尾三地域保健所（1）〕 腸管出血性大腸菌感染症（O26）（7）．〔広島市保健所（4）、福山市保健所（2）、広島地域保健所（1）〕 腸管出血性大腸菌感染症（O111）（2）．〔広島市保健所〕
四類	2	レジオネラ症（2）〔呉市保健所、尾三地域保健所〕，
五類全数	10	後天性免疫不全症候群（4）〔広島市保健所（2）、福山市保健所（2）〕， 風しん（2）〔広島市保健所〕， 梅毒（1）〔福山市保健所〕， アメーバ赤痢（3）〔広島市保健所（2）、尾三地域保健所（1）〕

3 一般情報

(1) 感染性胃腸炎について

感染性胃腸炎は、これから初冬にかけて患者の報告数が増加し、冬季に流行のピークがみられる感染症です。感染性胃腸炎をひきおこす病原体は、たくさんの種類がありますが、冬季に流行する感染性胃腸炎の病原体は、ノロウイルスやロタウイルスなど、ウイルス性のものが多くみられます。

特に、ノロウイルスは非常に感染力が強く、例年、高齢者施設等で集団感染が多く発生しています。これからの季節、注意が必要な感染症です。

病原体

夏場は、カンピロバクター、サルモネラ、病原性大腸菌、腸炎ビブリオなどの食中毒の原因菌が多く検出され、冬場は、ノロウイルスやロタウイルスなどが多く検出されます。

症状

発熱、下痢（水様便、血便）、腹痛、悪心、嘔吐などの症状が出ますが、病原体によって異なります。下痢症状が遅れてでる場合や発熱を伴わない場合もあります。

治療法

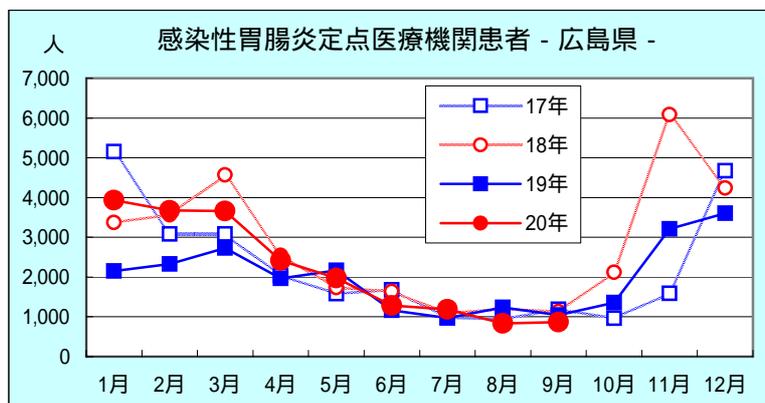
起因菌が不明の場合、初期治療は、対症療法を優先し、症状の重症度などから、抗菌薬の適応を判断する必要があります。

予後

一般的には良好ですが、O157による腸管出血性大腸菌感染症など、重篤になる場合もあります。

感染予防対策

- ・ 食品は衛生的に取り扱い、十分に加熱調理しましょう。
- ・ 外から帰った時、トイレの後、調理の前、食事の前に、必ず石けんで手を洗いましょう。
- ・ 嘔吐したもの、便で汚れたものには、直接素手で触れず、手袋を使って処理し、汚染箇所は次亜塩素酸ナトリウムで消毒しましょう。
- ・ 下痢のある時は、シャワーだけにするか、入浴する順番を最後にし、お尻は石けんをつけて、ていねいに洗いましょう。
- ・ 吐いたり、下痢症状がある時には、他の人とタオルなどを共用しないようにしましょう。



(2) インフルエンザの予防接種を受けましょう

例年、11月下旬から12月上旬頃にインフルエンザの流行がはじまり、1月下旬から2月上旬に患者数がピークになり、その後減少していきます。インフルエンザは、人口の約1割の人が感染するといわれ、特に高齢者や幼児は重症化しやすいので注意が必要です。

流行シーズンに入る前に予防接種を受けて、インフルエンザを予防しましょう。

予防接種を受けてから免疫力が上昇するまで2週間程度の期間が必要です。

予防接種の効果は5ヶ月程度持続します。

お近くの医療機関でインフルエンザの予防接種を受けることができます。事前に電話などで確認をして予防接種を受けてください。また、65歳以上の高齢者や60歳から65歳未満で心臓、腎臓又は呼吸器に重い病気がある方は補助が受けられますので、お住まいの市町にお問い合わせください。

流行期に外出する場合は、マスクをしてなるべく人ごみを避けてください。帰宅後は手洗いやうがいを行って、食事や栄養のバランスに気をつけて十分に睡眠をとってください。また、部屋は乾燥させずにある程度の湿度を保つことがインフルエンザの感染を少しでも防ぐよい方法です。